

銀河鉄道の夜

一 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと行われたり、乳の流れたあとだと言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知ですか」先生は、黒板についた大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジョバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなこともよくわからないという気持ちです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのでした。

「ジョバンニさん。あなたはわかっているのでしょうか」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立つてみるとうちはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどきまぎしてまつ赤になつてしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河はだいたい何でしよう」

やつぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答え

ることができませんでした。

先生はしばらく困つたようすでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、

「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはり同じもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急いで、

「では、よし」と言いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きないい望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラはその雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋から巨きな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な頁いつぱいに白に点々のあつた美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事をしなかつたのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネルラがそれを知つてきのどくがつてわ

ざと返事へんじをしなかつたのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

先生はまた言いいました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂なまや砂利かりの粒つぶにもあたるわけです。またこれを巨おおきな乳ちゅうの流れながと考えるなら、もつと天の川とよく似にています。つまりその星はみな、乳ちゅうのなかにまるで細こまかにうかんでいる脂あぶら油あぶらの球たまごにもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言いいますと、それは真空しんくうという光ひかりをある速はやさで伝つたえるもので、太陽たいようや地球ちきゅうもやつぱりそのなかに浮うかんでいるのです。つまりは私わたしどもも天の川の水のなかに棲すまんでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちようど水みづが深いほど青く見えるように、天の川の底そこの深ふかく遠とほいところほど星ほしがたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模型もていをごらん下さい」

先生は中にたくさん光る砂すなのつぶのはいつた大きな画面りやうめんの凸こレンズを指さしました。

「天の川の形かたちはちようどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私わたしどもの太陽たいようと同じようにじぶんで光あっている星だと考えます。私わたしどもの太陽たいようがこのほぼ中なかつころにあつて地球ちきゅうがそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらん下さい。こつちの方はレンズが薄うすいのでわずかの光る粒つぶすなわち星ほししか見えないでしよう。こつちやこつち

の方はガラスが厚あついので、光る粒つぶすなわち星ほしがたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河ぎんがの説せつなのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまの星についてはもう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河ぎんがのお祭まつりりなのですから、みなさんは外そとへでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい」

そして教室きょうしつじゆうはしばらく机つくえの蓋ふたをあけたりしめたり本ほんを重ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなはきちんと立たつて礼れいをすると教室を出でました。

一一

活版所かつばんじよ

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネルラをまん中なかつにして校庭がうていの隅すみの桜さくらの木きのところに集あつまっていました。それはこんやの星祭ほしまつりりに青いあかりをこしらえて川へ流ながす烏瓜かきうりを取りに行く相談さうだんらしかつたのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ふつてどしどし学校の門かどを出て来ました。すると町の家々ではこんやの銀河ぎんがの祭まつりりにいちいの葉はの玉たまをつるしたり、ひのきの枝えだにあかりをつけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲まがつてある大きな活版所かつばんじよにはいつて靴くつをぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉かどをあけま